

母性看護学の母性のとらえ方について

— 現行教科書3社の分析を中心に —

柏木恵子

I. はじめに

筆者は現在母性看護学を学生に教える立場にある。そこでは指定した教科書を使って授業をしている。教科書の趣旨として、「単に妊娠・分娩・産褥における看護を学ぶだけでなく、母性の特性を生理学的、病理学的に理解し、また母性の精神的、社会的背景についても認識するとともに、さらに広く母性の一生を通じた健康の維持・増進、疾病の予防の看護がねらいである」¹⁾と書かれている。しかしその趣旨どおりに教科書の構成が成っているかといえ、そのようにはなっていないように思える。

そこで母性看護を教える立場から、看護学のなかでの母性の位置づけや、社会の流れの中での、母性のとらえなおしをしてみたいと思い、現在使用している教科書の分析を通して母性看護学のなかでの教えるべき内容の手がかりを得ることを本研究の目的とした。

II. 結果・考察

母性看護学は、1968年のカリキュラム改訂でそれまでの「産婦人科看護法」に代わるものとして登場した新しい科目である。以後1990年にカリキュラムの再改訂が行なわれた。筆者はこの改正による変化の流れをE出版社の1981年、91年、95年版の教科書の内容に即してその構成要素を分析することで追跡した。各時代のカリキュラム改訂はその時々の社会的要請や教育政策等によって規定されるが、母性看護学の教科書にもその時々の家族観、母性、父性観、ジェンダー観などが色濃く反映していることが判明した。ただし、本稿では紙数の関係上それについては割愛し、最新版の95年の教科書を3つの出版社のもので比較検討したものを中心に考察をすすめることにしたい。

1. なぜ、3社の教科書を取り上げたか

E教科書・K教科書・M教科書を比較した理由は、E教科書とM教科書は、日本の看護教育の現場において、ほぼ50%のシェアを占めているといっている教科書である。E教科書は基礎看護学において50%のシェアを占めており、M教科書は専門科目において50%のシェアを占めているといえる。K教科書は看護教育のなかではまだ一部分でしかないが、すこしづつ伸びてきているといえる。そこで日本の看護界での二大教科書である、E教科書、M教科書とさらにK教科書を加えて比較してみることにした。

最新版の95年の教科書をこれら3つの出版のもので比較検討した結果E、K、Mそれぞれの編集方針によって、今でも内容に差があることがわかった。

2. 母性の定義をめぐって

「母性とは」についてではE教科書は「女性はすべて出産・育児を経験するものである」として母性をとらえている。K教科書は「女性の一つの機能として生殖としての役割」として母性を述べている。M教科書は母性についてのなかで、「いわゆる女性らしい優しさや子供への愛情にあふれていることが特徴である。」や「女性型骨盤やよく発達した乳房はすべて妊娠・分娩・哺乳という目的によく添えるよう構築されており、さらに女性らしい優しさや子供への愛情にあふれていることが特徴である」²⁾とE出版社よりもさらに女性としてまだ、「らしさ」などという決め付けた女性のとらえ方をしている。母性については、K教科書が偏りがいちばん少なく、E教科書は女性はいずれも出産・育児を経験する人というとらえ方から抜け出していないと思われる。M教科書はE教科書よりさらに偏った母性のとらえ方である(表3-①)。

表3-①

「母性とはについて」

	E 教科書	K 教科書	M 教科書
内 容	第一章 母性看護の概念 A. 母性とは B. 母性看護とは 1. 母性看護の概念の発達 2. 母性看護のありかた ①母性看護の対象 ②総合看護と継続看護 ③プライマリ・ヘルスケアのなかでの役割 ④倫理	第一章 母性と社会 A. 母性と看護 1. 母性期にある人 2. 母性と健康 3. 母性意識の変化と環境整備 4. 母性機能の理解と看護の実践 B. 命と社会 1. 母性看護と生命倫理 ①母性看護に求められる生命倫理 ②人工受精 ③体外受精 ④人工妊娠中絶	第一章 母性看護の特質 第二章 母性の特徴 I. 身体的特徴 A. 解剖学的特徴 1. 外性器 2. 内性器 B. 生理的特徴 1. 月経の生理 2. 性ホルモン 3. その他の周期変化 II. 精神的特徴 III. 社会的特徴
	次代が健康に生まれ育ち、人類が健全に発展していくための基礎である母性の役割 新しい生命を生み（生殖）、育んでいくためには、男女2つの性がそれぞれの役割を以てこの過程に関与していく。そのなかで女性は、自己の体内で胎児を育て分娩するという、役割をもち、母子は一体である。出生後も母子相互作用によって、母親の強い影響を受けながら成長していく。 母性の一生は、小児期・思春期・成熟期・更年期・老年期に大別でき、母性看護の対象は、このすべての時期にある女性である	女性は、生殖の過程で自分の体内で約280日という期間、胎児を育て分娩するという、男性とは異なった役割をもっている。この子供を生み育てる機能をもつのが母性である。 母性看護の対象は、生殖機能に関連した内分泌機能の開始する思春期から衰退する老年期に至までの期間にある人である。	母性とは、妊娠・分娩・哺乳という一連の生殖機能の他に、これを支え、これにそう精神・心理・行動の女性らしい特徴をも加えた女性の心身のトータルをいう 女性の身体の解剖学的・生理的な特殊性、これに加えて精神や心理の面、行動の面でも、いわゆる女性らしい優しさや子供への愛情にあふれていることが特徴である。 母親が直接わが子を育てるのと託児所やベビーホテルに委託して育てることとの間には大きな差があるわけで、反省する必要がある。

3. 性について

性についてではE教科書は性と生殖の構成でセクシュアリティの項目はあるが、内容的には「ホモセクシュアリティを社会的逸脱行為とみなすか、精神障害とみなすか、あるいは単なる一つの性的好みとみなすかについては一致した見解は得られていない」³⁾とされ、また「女性にとって多くの場合、愛が性交の必要条件であり、男性では本能的な欲望の遂行が第一義的であることが多く、必ずしも愛を必要とせず」⁴⁾等と記述され現代の新しい研究動向をまったく無視した表現となっている。K教科書は女性のからだ・男性のからだはあるが、セクシュアリティについての項目はない。M教科書は母性の特徴や女性の体の変化のみの項目しかなく、たとえば「一般に女性は男性に比べ繊細な神経をもち感情の起伏が豊かであり、男性が外向的・積極的・闘争的であるのに対し、内向的・消極的・温和である母性は、子供を生み育てるという機能を担っている。したがって、その社会的な立場も育児の行なわれる家庭のなかでの母性としての女性に焦点をさぼる考え方が母性観の共通の基盤となる」⁵⁾と記述されている。性のとらえ方に関する内容がなく父、男性の性やセクシュアリティの項目もない。(表3-②)。

4. 女性のライフサイクルについて

次に女性のライフサイクルについては、E教科書は思春期・更年期・老年期の特徴として身体的変化が中心であり、精神的・社会的な部分が少なく、特に社会的側面が不足しているといえる。K教科書は女性のからだところの項目で、女性とライフサイクルをあげそのなかで「ライフサイクルを経時的変化でとらえるのではなく結婚や出産そのものを選択しない自由な考えを持つ女性も現われている。」⁶⁾と記述されている。M教科書はK教科書と同様なあつかいであり、思春期・成熟期共に身体的な変化の部分が多くを占めている。(表3-③)

5. 家族に関して

家族に関しての項目も少なくE教科書は、内容的にも性役割の意識が強く父性に関しては「父親の育児における最も重要な役割は教育であり母性が円滑に遂行されるための大きな精神的支持を与えることが重要である。」や「父親のおもな役割は教育であり、終局的には子供を母親から離し、ひとりで自立して社会生活ができるように仕向けることであるとされている。」⁷⁾など古いままの視点であり育児への男女共存という考えではないといえる。K教科書は家族・サポートシステムの内容がいちばん多くかかれており性役割や父性に関しても、項目をあげて社会の変化に対応しようとする姿勢は見られる。しかし内容を見ると、父性のなかで「第一子の妊娠と乳児の誕生後に迫られる適応は、男性の生活においては、結婚した時に迫られる適応よりも大きく危機の時期と考えられる。こうした出来事は夫の孤独感を強め自分の親とのかつての幼児的な葛藤を復活させ依存性を高めるようである」⁸⁾と、表現されておりまだ古い意識の性役割から抜け出せない内容となっている部分が多々ある。M教科書は家庭について「母親は家庭の中心となってその維持・発展にかかわる立場にある」や「家庭は、その機能の変化によって形態の変化を生じるが、母性を中心とし、人間の愛情を基調とした共同体として不変に存続すべきものである。」⁹⁾と記述されており、また父親の存在を無視した表現ともいえる。父性についての項目もない(表3-④)。

	E 教科書	K 教科書	M 教科書
内	第二章 人間の性と生殖 A. 性と生殖の概念と意義 1. 性と生殖 2. 人間の性的特徴 3. 人間の性行動 ①性行動の意義 ②性反応(性交の生理と心理) B. セクシュアリティの文化と発達 1. 遺伝の性 2. 性差の性 3. 性差の性 4. 性同一性 5. 社会的性同一性 C. 人生各ステージのセクシュアリティ 1. 小児期 2. 思春期 ①身体的な性の発達 ②心理的な性の発達 ③自己同一性の確立 ④現代の問題 3. 成熟期 4. 更年期 5. 老年期 D. 性に対する考え方の変遷 1. 古代の性 2. 宗教による性の抑制 3. わが国での考え方 4. 性科学と性解放の発展 5. わが国の現状 E. 性生殖器(性器)の形態 1. 外性器 ①外陰 ②乳房 2. 内性器 3. 内性器の血流と神経分布 4. 骨盤 5. 男性性腺 F. 性機能 1. 成熟期における性周期 2. ギナトロピンとギナドトロピン放出ホルモン 3. 卵巣ホルモン 4. 卵巣の周期性変化 5. 子宮内膜の周期性変化 6. 月経 7. 体温の周期性変化(基礎体温)	第二章母性の成長・発達 A. 女性のからだと心 1. 女性のライフサイクルと健康問題 ①人口問題と女性 ②女性とライフスタイル ③教育 ④労働 ⑤家庭生活と意識 ⑥健康 ⑦女性に関する諸施策 2. 女性のからだ a. 性腺の構造と機能 ①外性器 ②内性器 ③関連骨盤内器官 b. 性周期 ①性周期の調節順序 ②性器外周期 c. 生殖能力および性反応 ①生殖能力 ②性反応 3. 男性のからだ ①性腺の構造と機能 ②生殖能力 ③性反応 4. 女性の心の発達 ①こころの健康とは ②心の発達 * 性をどうとらえるかの項目 なし	第二章 母性的特徴 I. 身体的特徴 A. 解剖学的特徴 1. 外性器 2. 内性器 B. 生理的特徴 1. 月経の生理 2. 性ホルモン 3. その他の周期変化 II. 精神的特徴 III. 社会的特徴 I. 思春期 A. 女子思春期の意義 B. 女子思春期の内分泌環境 C. 思春期の形態的变化 1. 身長・体重の変化 2. 体型の変化 3. 性器・乳房の変化 D. 思春期の機能的変化 1. 初経の発来 2. 思春期の発達の加速現象 II. 成熟期 A. 成熟期の母性 B. 月経と健康 1. 正常な月経 2. 月経と基礎体温計 3. 月経の異常 * 男性の性についての項目ない 性をどうとらえるかの項目 なし
容			

表3-③ 「女性のライフサイクル」

	E 教科書	K 教科書	M 教科書
項	健全な母性への準備の看護 A. 思春期の特徴 B. 初経準備教育 C. 月経教育 D. 思春期の徴症状と保健指導 E. 性教育の指導法 F. 健全母性育成事業 D. 更年期女性の看護 1. 更年期の特徴 2. 閉経に対する指導 3. 更年期障害に対する指導 E. 老年期女性の看護 1. 老年期の特徴 2. 老年期の看護 F. 特有な問題をもつ母性の看護と保健指導 ①思春期の母親 ②未婚の母 ③視覚障害のある母親 ④国際結婚した母性看護、在日外国人である 母性の看護 G. 家族関係指導	第二章 母性の成長・発達 A. 女性のからだと心 1. 女性のライフサイクルと健康問題 ①人口問題と女性 ②女性とライフスタイル ③教育 ④労働 ⑤家庭生活と意識 ⑥健康 ⑦女性に関する諸施策	I. 思春期 A. 女子思春期の意義 B. 女子思春期の内分泌環境 C. 思春期の形態的变化 1. 身長・体重の変化 2. 体型の変化 3. 性器・乳房の変化 D. 思春期の機能的变化 1. 初経の発来 2. 思春期の発達の加速現象 E. 思春期の保健 1. 勤労とスポーツ 2. 事故と疾患 II. 成熟期 A. 成熟期の母性 B. 月経と健康 1. 正常な月経 2. 月経と基礎体温計 3. 月経の異常 C. 結婚と健康 D. 不妊 E. 成熟期の保健 1. 妊娠死亡率 2. 人工妊娠中絶 3. 性病と性感染症STD III. 更年期・老年期 A. 更年期と老年期の母性 B. 更年期と更年期障害 C. 更年期以後の保健 1. 更年期以後の主な婦人科疾患 2. 保健指導の要点
目			

表3-④ 「家族（家庭）」

	E 教科書	K 教科書	M 教科書
項	第七章健全な家庭づくりの看護 A. 母性看護 1. 家族における母性看護の諸問題 2. 家族のライフサイクル 3. ファミリアと家庭医療 B. 結婚に関する指導 1. 結婚の意義 2. 家庭の機能 3. 結婚前の保健指導 ① 婚前保健教育 ② 婚前健康診査	2. 家族 ① 家族の成立 ② 家族システムとは ③ 家族システムの変化 ④ 性役割 ⑤ 母性 ⑥ 父性 ⑦ 柔軟な役割の考え方 ⑧ 家族の予防教育的機能	第五章社会と母性保健 II. 母性と家庭および地域社会 A. 家庭 1. 家庭とはなにか 2. 家庭の変化(機能の移行) 3. 現代家庭の問題 B. 地域社会 1. 都市 2. 農村漁村
目	C. 家族計画指導 1. 家族計画と受胎調節の意義 2. 受胎調節 ① 避妊法の種類 ② 不妊法の種類 ③ 指導法 3. 人工妊娠中絶の諸問題 4. 不妊症	3. サポートシステム ① サポートの必要性 ② 家族クライシス ③ 母となる人と子どもの絆 ④ ノーシャルサポートの基本理念 ⑤ マタニティサイクルとノーシャルサポート	

6. 母性看護に関連する法律について

母性に関する法律については、E教科書・K教科書・M教科書とも法的保護に関しては一応の知識は記載されているが、育児休暇の有給あつかいや介護休暇について等、仕事を続けていくうえでの新しい情報が不足していると思われ

ます。これは母性である女性が、家庭にあり主婦であり、仕事をしながら出産・育児を経験する人として考えられていないためと思われる。さらにM教科書は関係法規の資料の記載もない(表3-⑤)。

表3-⑤ 「母性看護に関連する法律等」

	E 教科書	K 教科書	M 教科書
内	C. 母性看護に関連する組織と法律 1. 母性看護に関係する主な組織 2. 母性看護に関係する主な法律 ① 母子保健法 ② 労働基準法 ③ 雇用の分野における男女の均等な機会および待遇の確保等女子労働者の福祉の増進に関する法律 ④ 育児休業等に関する法律 ⑤ 衛生保健法 ⑥ 戸籍法 ⑦ 死産の届け出に関する規定 D. 母性看護の場と職種 1. 母性看護活動の場 2. 母性看護活動に関わる職種 *抄録 関係法規	4. わが国の母性保健活動 ① 母性保健活動の意義 ② 母性保健活動の理念 ③ 母性保健活動の対象者 ④ 母性保健活動の従事者 ⑤ 母子保健事業 C. 母性をめぐる環境 1. 母性と労働 ① 働く女性の状況 ② 働く女性と母子保健 ③ 働く女性の保護 *付録 母性看護にかかわる法律	III. 母性と勤労 A. 女性労働とその保護の必要性 1. 女性労働の現状 2. 働く女性における母性保護の必要 B. 勤労が母性機能に及ぼす影響 1. 月経 2. 妊娠・分娩 C. 働く女性の母性保護 1. 生理日の就業が著しく困難な女子に対する措置 2. 妊産婦保護 3. 働く妊産婦の保健指導上の要点 4. 母子保健行政 IV. 母性保健行政 A. 母子保健行政のあゆみ 1. 知・立ち 2. 戦後の母子保健行政 B. 母子保健行政機構 1. 行政機関 2. 母子保健に関する保健医療施策
容	*育児休業給付金についての記載なし('95.4) 介護休業制度についての項目なし	*育児休業給付金についての記載なし('95.4) 介護休業制度についての項目なし	*育児休業給付金についての記載なし('95.4) 介護休業制度についての項目なし

7. 性教育・家族計画について

性教育・家族計画について、E教科書は「家族計画の実行によって、出産・育児・教育に要する経済的負担が調整され、家族への過重な負担が避けられ、…中略…同時に、心身共に健全なよい素質の子供が育成されるこのことは家庭の幸福と繁栄の基盤となるばかりでな

く、民族の繁栄や国の隆盛につながる「人づくり」の根本である。」¹⁰⁾と記述されており、個人の生殖行為を国というレベルでコントロールしようという意図が含まれていると思える。K教科書は「家族計画は、妊娠・出産を避けるのではなく、むしろ積極的に産み育てることを基本として、計画的な妊娠・出産によって、母親・家庭・子供の

健康と福祉を図ることを目的としている。」¹¹⁾と記述されている。M教科書も「家庭の生活設計を立てる場合に、子供をいつ頃、何人産み、その間隔はどのくらい空けるかを考えることが大切である。」¹²⁾と記述されており、このように3教科書とも結婚した男女は子供を産み育てるものであるという前提にたってかかれているとえる。決して、結婚した男女が「産むか、産まないか」を、

選択することができるといった発想ではない。避妊法・受胎調節の技術等についても、方法論・技術的なことがほとんどであり、心理面・社会的背景などは考慮されていない。(表3-⑥)。

この他に、「母性の歴史と現状」「母性看護の技術」「母性と環境」などの項目もあるがここではそれらは省略する。

表3-⑥ 「性教育・家族計画」

	E 教科書	K 教科書	M 教科書
項	第六章 健全な母性への準備の看護	4. 生殖コントロール	第六章 家族計画
	A. 思春期の特徴 B. 初経準備教育 C. 月経教育 D. 思春期の症状と保健指導 E. 性教育の指導法 F. 健全母性育成事業	a. 性教育 ①性教育の重要性 ②性教育と看護職 ③相談と指導	I. 家族計画とは A. 家族計画の意義 B. 家族計画の現況 1. 子供の数 2. 受胎調節の実行状況 3. 人工妊娠中絶の動向
目	B. 結婚に関する指導 1. 結婚の意義 2. 家庭の機能 3. 結婚前の保健指導 ①婚前保健教育 ②婚前健康診査	b. 家族計画 ①家族計画の意義と計画 ②受胎調節 ③人工妊娠中絶 ④不妊症	C. 家族計画の指導 1. 受胎調節指導の時期と要点 2. 不妊の予防と指導 3. 不妊手術に対する指導
	C. 家族計画指導 1. 家族計画と受胎調節の意義 2. 受胎調節 ①避妊法の種類 ②不妊法の種類 ③指導法 3. 人工妊娠中絶の諸問題 4. 不妊症		D. 受胎調節の技術 II. 家族計画と母子保健 1. 結婚・出産の時期 2. 出産回数と出産間隔 3. 人工妊娠中絶とのかかわりあい 4. 若年者の保健指導

Ⅲ. おわりに

3社の教科書とも全般に性と生殖としてセクシュアリティについて取り上げ、家族(家庭)や法的な部分の項目もある。しかし母性の取り上げ方においては、まだまだ古い考え方にもとづいているといえる。母性をもつ女性は「産む性」であり、すべての女性が将来母親となるべき者という無意識の前提に立って論述されているようだ。女性にとって出産・育児などは一つの選択肢であり、すべての女性がそれを実現するものとは限らない。「産む性」としてのみ女性を位置付けるのではなく、男性と共通する人間としての側面をもう少し、重視した位置付けが必要ではないだろうか。父性に関しても古い性役割での父親像であり、仕事ではなく育児を共に担う人という位置づけではないというような問題点がある。女性は出産すると、育児を担う人であり、仕事を続けていくようなライフサイクルでのとらえが弱いと思われる。内容的には、古い伝統的な性役割意識にのっとりた母性のとらえ方で書かれている部分が多いと思われる。

以上のような教科書分析の結果から、今後の母性看護学の内容には次のような点が含まれるべきであると思われる。

1. 身体的側面として、成長発達・妊娠・分娩・産褥の変化を女性のもつ機能として押さえ、女性の性を「産む性」の視点だけでとらえないこと。
2. 精神・心理的側面として、男女の対等な立場の視点で、女性が自分の性をどうとらえ結婚・出産・育児をどう選択していけばいいのかを考えさせること。
3. 社会的側面として、社会の中で(世界的動向もふくめて)、女性がどう自立して生きていくか、どうすれば自立していけるのか、最新の情報を提供すること。

今後これらのことを取り入れながら、母性看護の授業をよりよいものにしていきたいと思っている。

〔引用文献〕

- 1)松本清一編集:系統看護学講座母性看護学 [1]母性看護学概論,医学書院,1995
- 2)松本清一編集:系統看護学講座専門 16 母性看護学,医学書院,1991年
- 3)松本清一編集:系統看護学講座 22 母性看護学,医学書院,1981年
- 4)雨森良彦他:新版看護学全書 34 母性看護学 1,メヂカルフレンド社,平成7年
- 5)西島正博他編:標準看護学講座 30 母性看護学,金原出版,1995年
- 6)井上幸子他編:看護学大系 11 母子の看護,日本看護協会出版会,1991
- 7)5)に同じ
- 8)原ひろ子著:母性から次世代育成力へ産み育てる社会のために,新曜社,1991
- 9)叢書産み育てる教える 1,中内敏夫他:教育・誕生と終焉,藤原書店,1990年
- 10)叢書産み育てる教える 2,原ひろ子・阿部謹也他:家族・自立と転生,藤原書店,1991
- 11)叢書産み育てる教える 3,宮田登・中村圭子他:老いと「生い」隔離と再生,藤原書店 1992
- 12)望月嵩・木村汎編:現代家族の危機新しいライフスタイルの設計,有斐閣選書,1994

〔参考文献〕

- 1)香内信子編集:解説 論争シリーズ1資料母性保護論争,ドメス出版,1992
- 2)橋本紀子著:女性の自立と子供の発達北欧・フィンランドに学その両立への道,群羊社,1992
- 3)井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編:日本のフェミニズム 5 母性,岩波書店,1995